

保育ネットワーク このコーナーでは、特色ある取り組みや、活動を行っている会員保育所等について紹介します。

「いつも子どもが真ん中」 そんな保育所づくりを保護者と地域とともに

社会福祉法人 清澄会 広田保育園 (東京都五所川原市)



巨額な財政赤字 評判も最悪の状態からの“再建”

太宰治は小説「津軽」に「岩木山が見えるとうすぐ故郷」と記した。その岩木山の美しい山容が市内のいたるところから望める五所川原市の中心地から車で約10分、中層の市営住宅が建ち並ぶ一面に広田保育園はある。

1983年、認可外保育所としてスタートし2年後に認可。保育所を挟んで市営住宅とは反対側の住宅地はその頃売り出され、人々が住み始めた。その向こうには県営住宅がある。つまり、子育て世代が多い新興住宅地に誕生した保育所だったのだ。ところが、設立者の死去、園長の交代などで定員割れが続き、極度に財政が悪化した。保護者の信頼も失い、市に寄せられる苦情の8割は広田保育園と言われるような状態に陥った。県や市から厳しい経営改善命令が下され、1996年に法人役員を一新。当時34歳だった渡邊建道園長が着任したのは、その翌年である。



渡邊園長

保育内容も財政も情報公開し 保護者の声を積極的に受け止める

渡邊園長は自分と両親の寄付金で巨額な赤字を埋める一方、

保育サービスの多機能化を進めることで再建を図った。そして、「保育の質」を充実させるためのさまざまな取り組み、改革を行ってきた。ここで特に注目したいのは徹底した情報公開と保護者の要望を積極的に受け止め、保育に反映させるシステムである。

園のホームページには、前年度の詳細な事業報告書や財務状況を示す膨大な表が公表されている。これはどちらかといえば保育関係者や役所向けの発信だそうだが、じっくり目を通すと広田保育園の方向性や実践が伝わってくる。「会報 清澄」にも掲載し、保護者に配布もするが、懇談会で内容を分かりやすく説明している。給食をともに食べる「見える給食」と呼んでいる保護者会を年に2回実施しているが、情報公開は、保護者にも地域にも、そして職員にも「見える保育」そのものである。

保護者の意見、要望は、玄関の前においた「みんなのご意見箱」、通称「あったかフォン」というフリーダイヤル、個人面談、クラス懇談会で日ごろから受けるほか、2〜3年に1度、アンケートも実施してきている。自園の保育サービスが保護者や地域のニーズに対応しているかどうかを見極め、どのような保育のあり方が望ましいかを考えるためだ。このアンケートは無記名、職員からは見えない玄関の外に置いたポストへ投函、回収するという方法で匿名性を徹底している。

保護者の意見や苦情、要望は聞くだけでなく、全職員でしっかり受け止め、できるだけ速やかに具体的に対処することに努めている。寄せられた内容の周知は主任保育士、副主任保育士が、対応協議は園長と関係職員が、分析や保育への反映は専門チームが行う。



長利主任保育士



ホームページでは、寄せられた苦情・要望とそれに対する解決策を公開している。

ホームページには「苦情・要望等解決システムの設置について」が掲載され、職員に言いづらいことは外部の第三者委員にも相談できることを図解で分かりやすく示している。2006年からは寄せられた苦情とその苦情に園がどのように対応したかも公表している。

長利富美子主任保育士によれば、寄せられる意見や要望は「もっともだ」と感じる内容が多いという。たとえば、周囲を取り巻いた子どもたちに「これ作って」「私にも作って」と要求された保育士が、それに応じることに精いっぱい、その輪の中に入れないでいたおとなしい子に注意を払えなかった。たまたま、迎えに来た母親がその様子を見て、自分の子が無視されていると感じ、声を発しない子にも目を向けてほしいと要望した。また、園庭での保育士の位置についての疑問も寄せられた。外遊びをする時は、目を放すと危険と思われる場所に必ず保育士がつくが、その場を離れなければならない時、他の保育士に声をかけられないまま離れてしまうようなことがあった。そのような指摘を受けるたび、子どもたちの気持ちに寄り添い、安全を守る保育の基本を、職員間で繰り返し確認し、日頃の保育に反映させるよう心がけている。

保育所がここにあってよかったね と言える取り組みを

若い保育士4人による意向調査チームを組み、保護者の意識の把握に努めている。最近行った保護者へのアンケートを受けて、石沢絵瑠保育士(21歳)は、苦情よりも「声たちもよくやってくれている」といった声が多かったことで励まされたという。川浪由紀乃保育士(23歳)は、「とても勉強になったし、チームの先生とも保育所外で話し合ったりもできてよかった」と語った。意向調査チームに、若い保育士を選んだのはわけがある。社会経験も浅く、出産経験もない保育士が、保護者の状況を把握し、自らの保育を振り返ることを促すためだ。チームで作業することで保育士同士の絆も深められた。

過去において、数人の保護者からクレームが続き、その軋轢に疲れて辞めた職員もいた。

「どんな保護者であれ、保育所との間にはかけがえのない命=子どもが存在しているんですね。主義や方針が違うからといって子どもが振り回されることだけはあってはならない。否定や拒絶だけではなく、調和や協調を選択することしかできないように思いますね」と渡邊園長。

延長保育に取り組む保育所が多い昨今、保育時間は11〜



石沢保育士



川浪保育士



園児96名、園長1名、主任保育士1名、保育士15名、看護師1名、栄養士1名、調理師1名、事務員1名、園託児2名、バス運転手1名

12時間に及ぶ。日中の子どもの状況を一番良く知っている保育士が、保護者とともに子どもの育ちを支えていくという姿勢が大切なのである。

「保護者とともにというのは、昔からある古くて新しい問題。保育士と保護者と共通理解があって、なんでも思ったことを話せるというのは、やはり今の時代難しくなっている」。だからこそ、保護者と共通理解を深めるためのしくみが重要と言える。最近では、保護者のわがままや自己中心的な批判や要望はほとんどない。保護者の意向を尊重する姿勢が多く、保護者から賛同を得、苦情の何倍もの励ましや声援が届く。このことが保育者にとっては何よりの保育への活力、自信、子どもへの愛情の源になっているという。

「今の世の中、アスファルト・ジャングルのような感じもするけれど、願わくば、保護者と保育所と地域もいっしょに保育所がここにあってよかったね、と言える取り組みをしたいと思いますね」

これからも「いつも子どもが真ん中」の保育所づくりに精進すると渡邊園長は熱く語った。



種芋から植えたジャガイモ。収穫したらみんなで食べよう!



年間35回前後の柔道教室。指導は近隣の柔道部復師によるボランティア